



楓の誉

R5.7.20(第4号)
文責：瀧上 佳宏

中学校で取り残されたいために

(合志楓の森小の保護者の皆様に読んでいただきたい)

早いもので、本日で令和五年度の前期前半も終了。明日から夏期休業日(夏休み)に入ります。体育大会や生徒総会、夏季中体連等、生徒たちは実に意欲的に取り組み、また数多くの実績を残してくれたことを、校長としてとても嬉しく思っているところです。

ところで、菊池教育事務所では、「誰一人取り残さない菊池の教育」という合い言葉掲げ、菊池管内の小中学校に対し、ご指導・ご助言をいただいています。また、その実態を把握するため、学力学習状況調査(県学調等)で、正答率が四割に満たない児童生徒を洗い出すよう指示がありました。その本校の結果をざっくり言いますと、本校二・三年生の数学・英語については、およそ四分の一の生徒が正答率四割に届いていません。ただし、既にお知らせしておりますとおり、本校の県学調等の結果(本校平均)は、県平均を「大きく」あるい「かなり」上回る結果を残していますし、経年変化でも着実な学力の伸びを確認することができています。なのに……? 理由は明白、「二極化」が進んでいるのです。

合志楓の森小学校・中学校は校舎一体型なので、様々な情報を共有することが容易です。そこで小学校の県学調等の結果を見せてみました。すると、小学校段階での正答率四割以下の児童は、どの教科も一割以下でした。と

いうことは、中学校になってから、学力が低下した(取り残されるようになった)生徒がいるということになりますね。「中学校は何やってんだ」とお叱りを受けるべきところでしょうか。しかし、中学校になれば各教科の学習内容はより専門的で難しくなり、学習内容も増えるため、授業はどんどん進みます。

そこで、私(校長)は、県学調に合わせて実施している「iチェック」という質問紙調査で、正答率四割に満たない生徒の回答を追跡してみました。そうすると、正答率四割に満たない生徒は、そのほとんどが「家庭学習習慣がほぼゼロ」という回答をしていました。このことから、次のような仮説が成り立つのではないのでしょうか?

家庭学習の習慣が身につかない子どもは、小学校は授業だけで何とかついていけていても、中学校では取り残される

私は、家庭学習の習慣は、その時間の「長いか短いか」よりも、習慣そのものが「有るか無いか」の方が重要だと思っています。家庭学習の習慣が有る生徒は、その時間を一時間から二時間に伸ばすことが無理ではないですが、家庭学習の習慣がゼロの生徒は、たった三分でさえその時間を作り出すために、相当の強い意志が必要になってきます。なぜなら、家庭学習習慣は、一日や二日でできるものではなく、小学校一年生から長期間をかけて身につけてきたものだからです。

もちろん学力は知的な発達に大きく影響されますので、全てがそうとは言えませんが、中学校になって「取り残されない」ための未然の措置として、「自分の意思で家庭の学習用の机(ちゃぶ台で構いません)に向き合う習慣」の育成はとても大事だと思っています。

医療の進歩を実感(人工関節手術)

私事で恐縮ですが、私(校長)は人工膝関節置換手術のため、七月三日から六〇日ほど学校を離れています。上半身はピンピンしていますので、オンラインを活用し、学校経営に支障が出ないよう、可能な限りリモートワークで対応することにしており、この学校便りも病室で書いています。ただし、ホームページの更新は、教頭先生や教員業務支援員の 森 李佳 先生にお任せしているところです。

私は、いわゆる「がに股」がたたって変形性膝関節症になり、ここ七年間ほど膝の痛みに苦しんできました。そこで、この際思い切って人工関節に置換(左全置換・右半置換)する手術を受けることにしました。



右が手術前、左が手術後

手術そのものは大成功で、大きく曲がっていた膝が、真っ直ぐ人工関節でつながりました。コンピューター技術を駆使した「手術用ナビゲーションシステム」という最先端の医療機器が使われていたそうです。私は麻酔で眠っていたので見てはいませんが……。

ICTの進歩が、医療の現場でも急速に進んでいることを自分の体で実感することができ、私が常日頃から強調しているICTを活用する教育の意義を再確認したところです。

なお、八月二十八日の前期後半開始日には、普通に歩けるようになって復帰する予定です。



学校HPのQRコード